

?稗の種 : 短歌

著者	工藤, 重之
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 6
ページ	1 0 4 - 1 0 5
発行年	1918-03-31
その他の言語のタイトル	黒稗の種 : 短歌
URL	http://hdl.handle.net/2298/6791

朝の夢物たらぬてふ心より日ねもす徒^{ある}けど物足らずしていぬ。
かつて泣きし山路を友と歌ひつゝ忘れぬ杉を忘れ顔して。

○母戀しく

旅なれば淋しき時は街に出て母に似通ふ人を見にけり。
母に似し人と思ひつ後行けど顧みもせで暗にかくれぬ。
豫習の筆を又もどいめて母よりの古き手紙を出しては見る。

黒 稗 の 種

二部三年 工 藤 重 之

桑畑ちつともりて草いちぢり敵をまちつゝ物思ひする(三首、演習にて)
白煙銃口をいでて大根の葉は顛へつかほる煙硝
冬の日の襦袢の汗こそ悲しけれひとりつめたく膚に觸るゝも
暖國の檻に入れられ^{かうく}首たれ物思ひ顔の白熊を見ぬ(五首、動物園にて)
死せるごと獨り動かす微温湯につかれ^{くわ}る鰐をいとほしむかな
ただ重くもだせる鰐ようつそみにあゝ鰐のごと我も默ださむ
脚ふとく千里の沙漠走るてふ駝鳥の入れる二間のかこひ
やゝ廣きかこひの中に睦み居る孔雀二匹の戀を思へり

うつそみの尊き心赤丸を見てちき後の眞面目さに見る
あかまるよひそかに見つゝ悲しかり笑ひて人にのゝしり居れど
官能の響をたてゝ硝子管うちふるひつゝ、コルク粉飛ぶ（二首、ヤング率を測りて）
ちつとして躍りあがれるコルク粉を見入りつ晝はたけにけるかも

早春

農科三年 上村 英 一

○動植物實驗室にて

顯微鏡のぞき乍らも打ち笑めるとなりの友のうるはしき顔。
ひきがへるつけたる瓶の蓋とればフォルマリンの香の鼻をつくかな。
解剖の皿にのせたる殘骸をながむる友に夕日の照れる。
今更に寒き心地す實驗を終へて別るゝきさらぎの夕。

○隣りの坊ちやんの死を悼みて

たらちねの膝にたわむれよるこびし幼兒は今どこしへの旅。
はかなくもわづかの病にやまひとらはれて世を去りし子ぞあはれなりけり。
かの子をし失ひしかの二親はいかに淋しく日を送るらん。